



着実に歩み始めた長崎ペンギン水族館

はじめに

1998年3月に閉鎖された長崎水族館に代わる新水族館として登場した長崎ペンギン水族館（長崎市宿町、甲斐宗一郎館長）。2001年4月のオープン以来、順調な集客をみせている。大規模水族館が幅を利かせるなか健闘しているこの小さな水族館は、3年目も半ばにさしかかり、いよいよその真価が問われる時期に差しかかっている。そこで、本稿では長崎ペンギン水族館が着実な歩みをみせてきた背景を探るとともに、今後の課題や果たすべき役割についてレポートする。



（写真提供：長崎市水産総務課）

1. 入場者の動向

○開館から現在までの入場者数の推移

長崎ペンギン水族館の入場者数をみると、初年度は計画（20万人）を7割方も上回る33万人に上り、2年目も計画（18万人）を上回る20万人を集め、順調な滑り出しをみせた。3年目を迎えた2003年度はゴールデンウィーク中の連休数が昨年比べて少なかったことや悪天候もあって4月、5月は大幅な落ち込みとなったものの、6月以降は概ね前年並みを確保、8月は前年を上回るなど堅調に推移している。このため、本年度の目標に掲げている20万人も視野に入るのではないかとみられる。

図表1 長崎ペンギン水族館の入場者数の推移
（人、%）

月	2001年度	2002年度	伸び率	2003年度	伸び率
4月	32,913	18,359	△ 44.2	13,882	△ 24.4
5月	81,571	28,933	△ 64.5	20,302	△ 29.8
6月	27,995	12,263	△ 56.2	12,107	△ 1.3
7月	30,949	15,370	△ 50.3	15,053	△ 2.1
8月	52,614	33,785	△ 35.8	35,211	4.2
9月	21,333	17,746	△ 16.8		
10月	16,223	13,197	△ 18.7		
11月	14,806	10,408	△ 29.7		
12月	9,421	9,124	△ 3.2		
1月	14,755	12,998	△ 11.9		
2月	15,755	14,346	△ 8.9		
3月	15,170	15,604	2.9		
年度計	333,505	202,133	△ 39.4		

資料：長崎市水産総務課

○入場者の特長

ではどのような人たちが入場しているのか、その属性を2002年度実績からみていこう。

まず、年齢層からみると、大人が64%と3分の2近くを占め、子供（中学生以下）は36%、このうち3歳未満の幼児が10%を占めている。また、入場者のうち有料入場者は82%であり、その大半を個人客が占めている。なお、無料入場者は、3歳未満のほか、長崎市内の幼稚園・保育園、小・中学校からの学習目的の来館や障害者、高齢者などに適用されている。因みに、

3歳未満を除く子供の無料入場者数は約8,600人（大半が小学生以下）であり、長崎市内の幼稚園・保育園・小学校の園児・児童（約37千人）の約2割が2002年度中に長崎ペンギン水族館を訪れた計算となる。

また、高齢者についても、絶対数は少ないものの、老人福祉施設やデイケア施設などからの来館が多いようだ。

（参考）アンケート結果

なお、入場者の居住地域に関する正確な資料はないが、同水族館が2002年8月に実施したアンケート結果（期間22日間、回収607名）が参考になる。それによると、居住地域は長崎市内25%、その他長崎県内25%、福岡・佐賀・熊本県27%、関東・近畿・中部17%などとなっており、県外客が半数を占めているほか、来館回数が2回以上というリピーターが33%と3分の1に上っている。交通手段については自家用車が83%と大半を占め、長崎市中心部から離れているという立地特性を反映している。また、来館の感想では「楽しかった」が79%、職員の対応についても「良かった」が74%となっており、入場者の評価も高いようだ。

このように、開業景気が終わったあとも、同水族館では入場者数が底堅く推移している。これを支えている同水族館の魅力や特長はどのようなものであろうか、またどのような努力や工夫がなされているのだろうか。

図表2 2002年度の入場者の内訳

(人、%)		
区 分	人 数	構成比
総入場者数	202,133	100.0
大人	129,186	63.9
子供（中学生以下）	72,947	36.1
3歳未満	19,577	9.7
有料入場者	165,036	81.6
個人	154,956	76.7
団体	10,080	5.0
無料入場者	37,097	18.4
大人	8,917	4.4
高齢者	3,618	1.8
子供	28,180	13.9
3歳未満	19,577	9.7

資料：長崎市水産総務課

2. 長崎ペンギン水族館の特長

(1) 教育施設として水族館本来の目的を重視

かつて東洋一と謳われた民間の旧長崎水族館が入場者減少などから1998年3月末に閉館したあと、市民の水族館復活を求める声などに応じて、教育的な見地から必要として長崎市が水族館事業を引継ぎ誕生したのが長崎ペンギン水族館である。このため、同水族館は市民向けの自然体験型の教育施設として位置づけられており、水族館本来の目的である「生物の飼育・展示・観察・学習」を行うことを運営の基本としている。

また、教育施設との位置づけから、観覧料も類似の公立水族館より2割方安い500円（子供300円）に設定し無料及び減免措置も加えて、市民に広く利用してもらえるような料金体系となっている。

(2) ペンギンに特化 — 日本一の規模と内容 —

長崎ペンギン水族館の特長は、何といてもペンギンに特化した施設ということであろう。それを可能にしているのは、旧長崎水族館から引き継いだ、世界的にも高い評価を受けているペンギン飼育・繁殖の実績と技術・ノウハウである。

大きな特長をいくつか挙げてみよう。

豊富な種類と飼育数

展示・飼育されているペンギンは、地球上に棲息する18種類のうち7種類の125羽に上り、飼育種類が日本一であるだけでなく、その7割が長崎で繁殖に成功したものである。また、温帯や亜寒帯など棲息地の環境が異なるペンギンを同一施設でみられるのもここだけの特長となっている。

自然な生態を見せる

— 潜水するペンギン —

より自然に近い生態をみてもらえるよう、棲息地の環境に合わせ岩組みを施したり、^{つがい}番毎の巣穴を用意するなどの工夫がなされている。

巨大水槽・ペンギンプール



(写真提供：長崎ペンギン水族館)

また、最も特徴的なのが国内には例がないペンギンの潜水能力を観察できる大型潜水プール（水深4m、横幅15m、水量200トン）の存在である。ペンギン用プールとしては国内最大級といわれ、‘ジェット機のように’泳ぎ回る姿がみられることから、入場者の高い人気を集めている。

ペンギンに触れ合える

ペンギンを間近にみられ触れ合えるのも大きな特長である。他の水族館などではペンギンへの影響や事故などを恐れてか入場者をペンギンから遠ざけているのに対し、同水族館では積極的に触れ合えるようにしている。例えば、屋外でのペンギン・パレード（キングペンギン）やフンボルトペ

ペンギン餌やり体験



（写真提供：長崎ペンギン水族館）

ンギンへのタッチング（直接触れる）や餌やりは同水族館だけしかできないもので、大きな魅力となっている。これもペンギンを知り尽くしているからこそ可能となっている。

ペンギン情報室

ペンギンについてより深く知ることができるようペンギン情報室を設け、世界のペンギンに関する歴史、生態、現在の状況、さらに研究成果などを紹介しており、これも魅力の一つとなっている。

（３）生きものが増えてきた自然体験ゾーン

ペンギンに特化したといっても、長崎の魚や生物など約200種を展示しているほか、水族館ゾーンの周辺でも人工的に自然を復元する新たな試みがなされている。それは自然体験ゾーンと位置づけられ、里山を再現すべく小川や池、水田などを配した陸域部及び自然石護岸を施した河川部（開館と同時期に完成）、それに砂浜や潮溜まりなどを整備する海浜部（来年4月完成予定）の2つから構成される。陸域部には2年半を

経過し稲が実り、水生動植物や昆虫などが観察できるまでになった。このため、自然体験ゾーンを活用した子供向けの自然観察会、ネイチャーゲーム（自然観察とクイズを組み合わせ楽しみながら自然と触れ合うプログラム）などはすでに昨年度でも33回（参加者約1,400人）を数えるなど軌道に乗ってきている。

（４）専門家が運営、ボランティアも活躍

同水族館は長崎市が整備し(財)長崎ロープウェイ・水族館に管理運営を委託しているが、その運営体制も特長的である。陣容は館長以下職員6名、嘱託6名、臨時職員・パートなど20名体制となっており、職員・嘱託の大半は水産系の大学や専門学校、水産高校などの出身者が占め、若いスタッフが多いのが特長である。また、運営を所管し支援する長崎市側の部局も、部内に水産センターを持ち水族に関する専門知識・技術を有している水産部（水産総務課）であり、同水族館と専門知識・技術・維持管理等の面で協力・補完しやすい関係にある。

運営を支えているもう一つの柱が市民ボランティアである。開館当初から高校生を始め幅広い年齢層の市民ボランティアが集まっており、その数は現在140人近くに上る。専門家を講師として定期的に研修を受けながら、2つのグループに分かれて活動しており、水族館内で活動する‘ペンギンズクラブ’では清掃や案内、生き物の解説、飼育、ふれあい体験、セミナーの補助など、自然体験ゾーンを中心とする‘メダカの楽校’では案内や解説、生き物採取や環境整備、体験スクールなどの補助を担当している。平日は数名、土日・祝日には10～30名のボランティアが活動しており、特にイベントなどについてはボランティアの協力がなければ運営できないほど重要な役割を果たしている。このように、同水族館は住民参加もキーワードになっている。

3. 体験型メニューの充実と営業活動の強化に取り組む

（１）豊富な体験型メニュー・イベントを企画し集客へ

長崎ペンギン水族館では、その体験型教育施設としての特長を引き出せるよう、体験型メニューやイベントの充実・強化に取り組み、入場者の増加を目指している。

前述の通り恒常的なイベントとして、館内ではペンギンパレード（11月中旬～5月上旬）やタッチング（土・日・祝日）、ペンギン餌やり体験（土・日・祝日）、自然体験ゾーンでは自然観察会やネイチャーゲーム（第2、4土曜日）などを行っており、水族館の裏側を見学するバックヤードツアー（土・日・祝日）も人気が定着している。

また、稚魚の放流会、磯の観察会、写生大会、フォトコンテスト、夜の水族館ツアー（ペンギンの巣穴も見学できるバックヤードツアー、コンサート、クイズラリー等）、各種展示会、工作・体験教室など、季節や時期に合わせて職員やボランティアが企画・運営に知恵を絞っている。因みに、今夏は「サマーナイト水族館」（2日間、21時まで開館、700人来館）や長崎総合科学大学海洋文化スポーツセンターと共同で「カヌー体験」（1日のみ、320人参加）などを実施し好評だった。

また、海中散歩が疑似体験できるバーチャルシアター（立体映像）では、今年6月から新メニューとして来館者がその場で彩色した魚が大画面スクリーンで泳ぎだす参加型コンテンツ「お魚工房」を開始し、好評を得ている。

生き物や自然を楽しみながら学ぶことができる同水族館は、長崎市科学館とともに小学校の総合学習に役立つ施設として定着してきているようだ。

（2）営業活動の推進

市民のための教育施設・公共施設とはいえ、入場者数の確保は施設の有効活用や維持・発展にとって不可欠であることはいうまでもない。その意味で、同水族館が力を入れていこうとしているのが、周辺地域の学校・各種福祉施設やこれまで交流のなかった県外の旅行代理店などへの訪問・営業活動である。

1年目、2年目までは、若いスタッフを中心にボランティアの力も借りて運営し体制固めに注力してきた結果、積極的な営業活動は後回しになっていたが、3年目に入り長崎ロープウェイや長崎市科学館などと連携し本格的に取り組み始めた。そこで痛感されたのが予想以上に認知度が低いということであったという。

○情報発信の状況

では、同水族館の情報発信はどのようになっているのだろうか。独自の情報発信手段としてはホームページと情報誌がある。ホームページアクセス件数は1日平均250件（2002年度）に上り情報受発信に役立っており、情報誌「逢qua」は年2回、2000部を発行し、市内の小中学校などに配布している。また、九州や西日本を中心にタウン誌などへの広報（2002年度、21誌）も実施している。このほか、長崎市が体験型施設の一つとして紹介しているほか、去年は長崎市のあまり知られていない魅力発信事業のなかで‘空飛ぶペンギン’（潜水するペンギン）として福岡市などで紹介した。

一方、テレビや新聞等マスコミに採り上げられるケースは多く、地元マスコミには

折に触れて紹介されており、さらに全国版でもテレビのニュースやペンギン関連の番組など2002年度には9回に上っている。

しかし、長崎市水産部や同水族館によると、旅行代理店を訪問してみると、旧長崎水族館やその閉館については知っていても、長崎ペンギン水族館が開館したこと知らないケースが大半というのである。そこで、認識を新たに九州北部を中心に(財)長崎ロープウェイ・水族館として2名体制で営業活動に取り組んでいるところである。

○修学旅行に注力

営業にあたって、重点を置いているのがまだ利用が少ない修学旅行である。そこで、学校側に提案できるような体験メニュー、例えば水族館の仕組み・バックヤードツアー、給餌、自然体験ゾーン観察会、ネイチャーゲームなど多様な選択肢づくりを進めている。また、来年度には海浜部が完成し海浜での観察会やカヌー・シュノーケリングなどの海洋スポーツ体験もメニューに加わることから、他の水族館にない多様な魅力的な体験メニューを提案できるものと期待される。

また、学校側が利用しやすいように旅行代理店とのクーポン契約を推進しており、現在、8社との契約に漕ぎ着けている。

4. 今後の発展に向けて

(1) ゆっくり楽しんでもらうために

同水族館(本体)は予算上の制約から延べ2,700㎡ほどの小振りな建物となっており展示スペースも限られていることから、展示物のみの入場者の場合30~40分もあれば一巡できる。このため、もっとゆっくり楽しんでもらう施設づくりが課題に挙がっている。その対応策としてイベントなどの充実を図っているところであるが、もう一つ期待されるのが館内外の施設・環境の連携である。

水族館ゾーンと自然体験ゾーンの陸域・河川部でスタートした同水族館では、3年目を迎え陸域・河川部が自然に近づくとともに来年度には海浜部が生まれ、「橋湾海浜公園」としての整備が完了する。そうなれば、里山や川があり海辺にも出られ水に触れやすいという全国的にもユニークな水族館となる。これらの周辺環境を使いこなし活かしていくことができれば、1日中楽しんでもらうことも可能となろう。そのためにもカギとなるのが、運営にあたるスタッフである。

（２）スタッフの成長に期待

甲斐館長は若い飼育担当者に対し、これまでは生き物と来館者の橋渡し役として「自分がやっていることや生き物について来館者に伝えること」を求めてきたが、今後は次の段階として「もっと前面に出て、月に一度は来館者に生き物の話をする事」を求めていくという（まずは‘飼育こぼれ話’と題したスピーチを行う計画）。また、これまでは日常の飼育・管理とイベントの企画・運営という２つに努力してきたが、水族館の重要な役割である調査研究が手薄だったことから、今後は３つ目の柱として地道な調査研究にも取り組んでいくことにしている。それが水族館の質と魅力を高めていくことになるのはいうまでもない。

終わりに

気軽に立ち寄って生き物や自然に触れその大切さに気づいてもらおうという長崎ペンギン水族館の趣旨や役割は、市民の間にも浸透してきているものとみられる。また、過去からの蓄積を活かしたペンギンワールドとしてさらに磨きがかかっており、全国のペンギンマニアは勿論、子供からお年寄りまで幅広い層に利用され、長崎の新名所ともなっている。今後もペンギンの飼育展示や他の展示内容の充実を図りながら、地元のみならず全国に通用する自然体験型施設として魅力を高めていくことが期待される。

（中村 政博）